

現代アメリカのジェンダーと家族研究

— 結婚、家事労働、母親と父親の役割についての考察 —

石井クンツ昌子

要約

現代のアメリカの家族関係は多様であると同時にたえまなく変化している。これらの変化は家族の中のジェンダー関係や意識に顕著にみられる。実際、1980年代以降のアメリカの家族研究では、ジェンダーと家族の関係に焦点をあてているものが多い。更に、従来のジェンダーの定義の仕方にも問題意識を持つ研究者も多く、ジェンダーそのものについての意味も盛んに議論されてきた。ジェンダーを新しい立場からみる考え方のひとつに「Doing Gender」というコンセプトがある。これはジェンダー・アイデンティティが「性差」とか「性役割」から生まれてくるものではなく、毎日の行動の中から生まれてくるコンセプトであるという考え方である。

本稿ではこの考え方の柔軟性について指摘しながら、現代アメリカにおける結婚、家事労働、そして父親と母親の役割やイメージに、行動からくるジェンダーの定義をあてはめてみた。その結果、男性と女性の経験する結婚、家事労働、そして親の役割にはかなりの量的、質的な差があるということが明らかにされた。このように、違った家族関係や家事労働を経験しながら形成されるジェンダー・アイデンティティはもともと男女という「性」の違いからくるものではなく、毎日の「行動」から生じるものであると思う。ジェンダー的視点は、これ以外の家族の問題（例えば高齢者の介護）などを考える上にも必要である。これは日本においても今後の研究課題となるであろう。

はじめに

現代アメリカの夫婦関係そして親子関係はたえまなく変動し続けている。これらの変化は家族社会学、人文科学、発達心理学、文化人類学などの研究で明らかにされている。更に、この変化はジェンダーに焦点をあてた家族関係において顕著である。そのいくつかの例として、男性で子育てに参加する人たちが増加していることを示唆する研究者もいれば(Pleck, 1987)、夫婦家事分担の均衡性への傾向を指摘する研究者もいる (Coltrane and Ishii-Kuntz, 1992)。更に夫婦間の愛情表現の変化も指摘された (Cancian and Gordon, 1988)。これらの変化が実際に起きているのか、あるいは起きているとしたら、どの位の速さで変化しているのかなどという点については論争の余地は充分ある。しかし1980年代以降のアメリカの家族学の研究には、家庭内でのジェンダー関係の変化を指摘するものが圧倒的に多い。この傾向は1980年代、1990年代の *Journal of Marriage and the Family* に含まれている論文のタイトルを見ると明らかである。そして *Gender and Society* という1980年代後半に発刊された専門誌にもみられるように、現代アメリカの家族学の研究の中には、家族とジェンダーの関係に焦点を置いたものが非常に多い。更に、アメリカ家族学会 (National Council on Family Relations) の中にも1980年代後半に *Feminism and Family Studies* というジェンダーと家族に焦点をあてた分科会ができた。そこに属している会員の人数は他の分科会と比べても段突に多いことから現代アメリカの家族学におけるジェンダーの重要性がよくわかる。

この論文では、1980年代から重要性を増してきた家族の中のジェンダーについて考察してみる。特に現代アメリカの家族学者によって研究されている中から、結婚、家事労働、そして母親像／父親像の3つのトピックを選び、ジェンダー的視点から現代のアメリカの家族を探ってみたいと思う。同時に日本の家族とジェンダーについても、アメリカと比較しながら考えてみたい。これらのトピックに焦点をおくために、この論文ではヘテロセクシャル、そして結婚をしているカップルの家族を対象に話を進めたい。

尚、スペースの都合上、アメリカの現在までの全てのジェンダーと家族に関する論文を紹介するのは不可能である。私が紹介する研究は、内容的にジェンダーと家族関係に焦点を置いていて、更に考え方に刷新さがあるものを中心に選んだ。又、これらの選択された論文は主に社会学の研究が多いが、他の分野の研究もできるだけ含めるように努力した。

この論文では、最初にジェンダーの定義について触れ、続いて現代のアメリカにおける結婚と家事労働、そして母親と父親についてジェンダーの領域から考察してみる。最後に、現代のアメリカにおけるジェンダーと家族学についての研究の傾向と、今後の研究課題などについても述べたいと思う。

ジェンダーの定義

日本で最近よく使われている言葉の中に「ジェンダー」がある。特に「ジェンダー・フリー」とか「ジェンダー・バイアス」というような使われ方が多いようである。しかし、日本におけるジェンダーの意味については、いわゆる「社会的、文化的な性差」というような定義が浸透していて、ジェンダーという言葉の、他に可能な意味などについてはあまり討論されていないように思う。

アメリカの家族社会学者の多くはジェンダーを個人の身体的特性からくる「性差」という見方で研究を進めることが多い。その他にも「性別役割」といった観点からジェンダーの研究を進めることが多い。しかし、この「性差」と「性別役割」の両方の考え方には問題がある。ジェンダーを個人の特性と考えてしまうと、男女差あるいは「性差」に焦点がいつてしまい、男女の類似点や、女性の間での、あるいは男性の間での相違点を見失ってしまう。「性別役割」という考え方については、既存する男女の力関係から研究が始まるので、頻繁に見られる男性優位の関係に到達するプロセスが見過ごされるという批判がフェミニスト社会学者達の多くから出ている。

そこで一番妥当な考え方はジェンダーを「行動」としてとらえることである (West and Zimmerman, 1987)。ウェストとジーマーマンはそれを「Doing

Gender」として語ったが、それはジェンダーが毎日の生活の「行動」の中から作られ、定義され、そして維持されているという考え方である。この理論によれば、家族の中では、女性も男性も自分達のジェンダー関係はそれぞれがとる「行動」をもとに作り上げていくということになる。この考え方は、従来の単なるジェンダー＝「性差」といった受け身の定義からは、ほど遠い。いくつかの例をあげて更に、説明してみよう。

例えば、家事や育児を専門にする「主夫」の場合、個人の特性では男性であるし、性別役割では伝統的には女性の領域の仕事をしているから「女性的」となってしまう。このように従来の定義によると両極端のジェンダー・アイデンティティを持つような人間は、社会からみると「何かが変だ」と普通はなってしまうのである。しかし、「Doing Gender」の視点から考えると、「主夫」は家事や育児を通して、自分なりの「ジェンダー」を作り上げているという事になる。つまり、「主夫」にとっては、家事や育児は必ずしも「女の仕事」ではないから、自分は「女性的」でもなく、さらにそういう「主夫」にとっては「男らしさ」という意味が重要でなくなるのである。実際、アメリカの研究では「主夫」をしている男性には「主婦」の友人が多く、彼女たちのアイデンティティーにかなり親しみを感じているということがわかっている (Pleck, 1985)。つまり、「主夫」でも「主婦」でも、家事や育児を毎日の行動で繰り返していくうちに同じような、ジェンダー・アイデンティティを持つことになるのである。

反対の例では、第一戦に出てフルタイムで働く母親達がいる。彼女達の中には、家庭よりも仕事を通して自分の「ジェンダー」をつくりあげている人たちが多くいる。このような女性達は「性別」では女性であるが、仕事に対する情熱や仕事にかかる時間はまさに「男まさり」である。そういう意味では、「主夫」と同様に、社会的には「どこかが変だ」とか「あまり良くないこと」になってしまう。しかし、これらのいわゆるキャリアウーマン達には、従来の「ジェンダー」の定義の中にある「女らしさ」などは問題外であるし、そういう事を言っているのは生き残れない厳しい世界にいるのである。このよう

に、キャリアを持って働く母親達のジェンダー・アイデンティティは、むしろ同じようなキャリアを持って働く男性と自分を比べることにより、作り出されていくものと考えることができる。

こうして個人のアクティブな「ジェンダー」作りに焦点を置く方が、従来のジェンダーの定義よりも、かなり現実により近い考え方といえる。こういう観点からジェンダーと家族を考えると、どのように家庭内に男女差ができ、そしてその差がいかにか維持されているのかなどが良く理解できると思う。さらに、「Doing Gender」のコンセプトは、変容しつつある夫婦の関係やかたち、そして親の役目などを説明する際にも応用できる。

現代アメリカの結婚

アメリカの著名な社会学者バーナードは1972年の本の中で、どの結婚にも2種類の結婚、すなわち「夫の結婚」と「妻の結婚」があると提唱した(Bernard, 1972)。これは夫の経験する「結婚」と、妻の経験する「結婚」には質的な違いがあるという考え方である。はたして、バーナードの提唱する2種類の結婚はあるのか。過去のアメリカでの研究のいくつかを、例にとって見てみよう。ここでは、特に夫婦の親密度、コミュニケーション、そして夫の妻への暴力についての研究に焦点をあてて考察してみる。

夫婦の親密度とはお互いの悩み事や考え事を話し合うことや、理解する事、または理解しようと努力をする事などによって計られる。更に、夫婦間の性愛的親密度も頻繁ではないが、研究されているトピックのひとつである。アメリカのこの分野の研究によれば、女性のほうが男性より結婚から得られる親密さを大事にしているという事がわかっている(Williams, 1988)。また、妻の方が夫より自分のフィーリングや意見をはっきり配偶者に伝えるということもわかっている(Morton, 1978)。更に、愛情の表現方法の研究では、夫は経済的なサポートや家事を手伝うことを愛情の表現としているが、妻は言葉の表現からくる暖かさで愛情の表れを感じるという違いもでている(Cancian, 1986; Rubin, 1976; Rubin, 1984)。性愛的親密度について言えば、妻の

方が抱擁のような間接的な性の表現を好み、夫はもっと結合的な性の営みと表現を好むということがシュナイダーとゴールドの研究で明らかになっている (Schneider and Gould, 1987)。更にスキノバツツは、夫婦で性愛関係に不一致がある場合、普通は夫の欲望の方が満たされるような結果で解決されると述べている (Szinovacz, 1984)。

コミュニケーション学の研究によると、夫と妻のポジティブやネガティブなメッセージの交換にも差があるという事がわかっている (Noller, 1982; Notarius and Johnson, 1982)。これらの研究によれば、妻は話をする時はポジティブかネガティブかをはっきりさせてから言うが、夫はどちらかというところと中立的な意見を言うことが多い。しかし、夫が中立的な立場で話をしていても、実は夫が妻の言っていることを理解するより、妻が夫の言っていることを理解する能力の方が高いということも、研究で発表されている。更に、妻の方に相手が何を言うのかといった予言能力が夫よりもかなり高く (White, 1985)、妻の方が夫よりも会話の話題作りに努力をするという事も (Fishman, 1978) 研究結果として記録されている。他にも、女性の方が、先に結婚問題についても話を持ち出すことが多い (Glenn, 1987)。

家庭内暴力についての研究成果を読むと、女性の経験する結婚と男性の経験する結婚の違いが一目瞭然でわかる。つまり家庭内暴力も結婚関係のネガティブな一面であるのだから、暴力を受ける妻と、暴力を振るう夫の経験の違いが明らかに違うということである。まず、統計で明らかになっているように、家庭内暴力の被害者のほとんどは女性である。妻が夫を虐待するという「Husband Abuse」の研究はないことはないが (Steinmetz, 1977)、配偶者暴力に関する研究のほとんどは妻が被害者の場合である。その中の研究結果を少し例にとってみよう。まず妻に暴力を振るう夫は、その暴力を手段にして妻を怖がらせたり、沈黙させたり、または自分の力を誇示したりする (Dobash and Dobash, 1979; Ptacek, 1988)。更に、暴力を振るう夫の中には自分の妻に対する暴力の度合いが、妻が夫に振るう「言葉の暴力」と同じレベルだと信じている人たちが大勢いる。しかし、妻たちの多くは、夫の暴

力の度合いが、断然高いと信じているのである (Browning and Dutton, 1986; Edelson and Brygger, 1986)。このように、配偶者間の暴力については、夫と妻の経験や考え方のギャップがかなりあるようである。

これらの、結婚などに関する研究の成果をみると、男女の経験する結婚、そして結婚に対する考え方はかなり違うので、やはりバーナードの唱えた「夫の結婚」と「妻の結婚」の2種類があるのだということが良くわかる。この2種類の結婚は、夫婦間の親密度にも、コミュニケーションの仕方にも、そして配偶者間の暴力にも表れている。

この2種類の結婚は日本の夫婦を見ても明らかである。神原 (1996) は、日本の家族研究の中でも、とりわけ結婚や夫婦関係に関する研究が立ち遅れていることを指摘している。日本の妻の側に、夫との情緒的な関わりを期待する傾向が強まってきているのに、夫たちの意識の変化が遅れているとも神原は指摘している。更に、日本には互いの他人的な生活領域を認め合っている夫婦が多い (Ishii-Kuntz and Maryanski, in press)。このように時には、声援をおくることはあっても、基本的には干渉しあわないという夫婦関係様態を、神原は「疑似他人関係」と呼んでいる (神原, 1991: 143-148)。これらの例を見れば、日本の「夫の結婚」と「妻の結婚」の差には、アメリカ以上のギャップがあるように思う。

この日米の夫と妻の違った結婚経験を「Doing Gender」の視点から考えるとどうなるであろう。研究成果でも明らかなように男性、そして女性は違った結婚生活を行動的、心理的そして情緒的に経験しながら、自分自身の「ジェンダー」を作り上げていくといえる。例えば、夫婦の親密度に関しては、妻の方が結婚から得られる親密性を重要視しているし、自分のフィーリングをはっきり配偶者に伝えるのも妻である。更に、妻の方が夫の言っている事を理解する能力があるし、会話の話題作り努力も妻の方がしている場合が多い。これらの妻の経験を見れば、妻が結婚という人間関係に費やしている身体的、そして精神的時間が夫よりかなり多いということがわかる。女性は妻としての結婚においてのこれらの「行動」を通じて、ジェンダー・アイデンティティ

を形成しているのである。「Doing Gender」的に考えれば、この「行動」をベースにしたアイデンティティが、伝統的に女性に課された「妻の役目」と一致していることになる。この場合、あくまでも妻の「行動」から形成されたアイデンティティであり、従来の「女性の仕事は家庭」といった見方からはじまるアイデンティティとはプロセス的に違うのである。

現代アメリカの家事労働

アメリカの労働に関する研究の多くは賃金をもらう家庭外の仕事に焦点を当ててきたが、過去15年位の間に、家庭内の無報酬労働に焦点をあてる研究も多くなってきた (Berk, 1985; DeVault, 1987; Pleck, 1985)。家庭内の仕事はプライベート、無報酬、女性が行うもの、更にレクリエーション的ということで、普通はあまり感謝されず、無論、社会的には認められない、あるいは低い地位にある仕事である (Daniels, 1987)。

アメリカのデータによれば、家庭内外での仕事を合計すると、男女差はほとんどないが、家庭内だけの仕事をみれば、男性は女性の約4分の1しか行っていないことがわかっている (Berk, 1985; Coltrane and Ishii-Kuntz, 1992; Pleck, 1985)。社会学者ホークシルドのいう「セカンドシフト」というのは、働く女性が家に帰り、家事や育児をする「シフト」のことをいう (Hochschild, 1989)。これに加えて、毎朝、食事やお弁当作りなど、子供たちを保育園や学校に送り出す用意を入れると、実際はほとんどの母親たちが、外の仕事を終え、家に帰ってからする家事労働は「サードシフト」(Third Shift) になるのである。このように、アメリカの家事や育児分担の研究の多くが現代アメリカにおいても、「女性が家庭を守り、男性は外で働く」という考え方が根強く生きていることを伝えている。

しかし、男性学で有名なプレックは現代の夫は約30パーセントの家事をしているが、これは数十年前のデータと比べると10パーセント位の上昇で意義のあることと見るべきだと指摘している (Pleck, 1985)。これに対して他のデータを分析した社会学者は (Coverman, 1985)、男性の家事参加が必ずし

も上昇していないということを発表している。この点については色々論争もされている。しかしデータの分析法及び数値の訳し方の違いはあるとしても、共通して言えるのは、女性が家事の多くを過去も現代でも行っているという事実である。

この家庭における男女不平等の状態をジェンダー的視点から研究することは重要である。ほとんどの場合、女性の家事労働は男性の家事労働と本質的に違う。無論、女性の家事労働に費やす時間が男性よりも多いのは明らかであるが、それ以外にも、家事労働の種類、環境、そして周りの家族の期待などでも男女差が出てくる。アメリカの家事労働の研究では、その労働に費やす時間を目安に男女の差を分析するものが多かった (Coverman, 1985; Coltrane and Ishii-Kuntz, 1992; Ishii-Kuntz and Coltrane, 1992a, 1992b)。これらの研究は家事労働における男女不平等を明確にするのに貢献した。しかし、男女の家事労働の質や環境の違いを明らかにするには、量的な研究よりも質的な研究が必要となる。つまり、家事に費やす時間だけを分析しても、男女の家事の内容やプロセスはわからない。

後者の問題を考慮にいれ、ジェンダー的視点から観察及び聞き取りしたデータを分析すると、量的な差だけではわからない、家事労働の質的な男女差が浮かび上がってくる。まず、女性のする家事は掃除、料理、洗濯などの毎日たゆまなく繰り返される仕事が多い (Berheide, 1984; Berk, 1985)。それと対照的に男性の家事労働は家庭大工、庭仕事、ごみ捨てなど不規則的で回数の少ない仕事が多い (Berk, 1985; Pleck, 1985)。更に、社会学者のパークとパークは、女性と男性の家事労働をするタイミングの差に注目した (Berk and Berk, 1979)。パーク等の研究によれば、小さい子供の両親が、朝の時間に子供と一緒にしなければならないことは多い。夕方の子供の世話は、妻が夕食の後片付けをしている時は夫が子供をみるが、妻が後片付けを終わった途端に、夫は子供の世話をやめ、妻に子供を預け、自分のリラックスタイムに突入するといったパターンが多い。他に、男性の家事労働は週末に集中して行う種類が多いが、女性の家事労働は、平日、週末に関係なく

行われる (Clarke, Allen and Salinas, 1986; Shaw, 1988)。

このように質的に違う男女の家事労働を更に詳しく研究したのがディヴォルトである (DeVault, 1987)。彼女の研究では、家事の一部である「料理」を例にとって、詳しく男女差を説明している。特に料理のプランニングや用意のプロセスに男女差が表れるとディヴォルトは指摘している。女性は料理する食べ物以外の装飾品にも気を使い、更に新聞や雑誌を読んでいる時も料理のページがあるとそれに少なくともさっと目を通すが、男性の場合はそういう事はしない。さらに、食事の際には家族全員が会話に参加できるように気を使うのも女性である。食事の準備に際しては、アメリカの女性の場合常に白い皿を頭に描き、その上にのせる野菜物、肉類、穀類を想像しながら食料品の買い物をして、料理をする。それに比べて、男性が食事を用意する場合には、同じような白い皿を頭に描くが、その上にはとりあえず食べ物をのせるというような準備のパターンが多い。そのため、男性の料理する食事は一品で全ての栄養素が入っているような、例えば、スパゲッティとかハンバーガーといった献立が多い。

日本においては、まだ質的な研究は少ないが、量的に男女の家事参加を比較した研究が多くなってきている。日本の男性は国際的にも家事時間が非常に少ないことで知られている。石井クンツの日米比較研究によると、アメリカの男性は女性のする家事の量の4分の1くらいをするが、日本の男性は女性のする家事の量の100分の1以下しかしていないという (Ishii-Kuntz, 1994)。日本の男性の家事参加が進んでいるというデータもあるが、依然として自分の身の回りのことすら完全にできない男性が多いのが日本の現実である (鹿嶋, 1993)。しかしその中で、育児や家事を率先して実行している少数の日本人男性もいることを忘れてはならない (育児連, 1995; たじり, 1990)。日本とアメリカの男性の家事参加への量的相違はあるが、両国に共通して言える事は、家事労働は主に女性の仕事だという考え方が今だに、根強く存在しているということであろう。

このような、男女差が顕著な家事労働を「Doing Gender」の視点から考え

るとどうなるのであろうか。家事労働が女性の仕事だという考え方が現在でも根強いが、そういう社会的な影響で男女のアイデンティティが最初から決定するという間接的な見方をとらない。むしろ、毎日の「行動」の中で生まれるジェンダー・アイデンティティに焦点を置き、それがいかに社会的な要素と関連しているのかに焦点を置く。男性の多くは家事にあまり参加せずに、経済的なプロバイダーとして毎日の仕事をする。それに比べて、女性の多くは、共稼ぎ夫婦の女性も入れて、家事に費やす時間が男性よりかなり多い。これらのプロセスから生まれるアイデンティティは、男性の場合、「家事はしないが経済的には妻や子供を支えている」、そしてこの行動が社会的に認められているから自分は「男らしい」という事になり、その結果、自分の男性としてのジェンダー・アイデンティティを確立する。女性に関しては、逆のプロセスになる。しかし、「Doing Gender」のプロセスはこのように従来の男女の役割を迫行している夫婦ばかりではなく、先にも述べたが、ノントラディショナルな「主夫」や「キャリアウーマン」のアイデンティの形成にも適用できる。

現代アメリカの母親達と父親達

従来の「親」研究は、主に親が子供にどのような影響を与えているのかというところに焦点を置くものが多かった。つまりどちらかというところ、子供の「幸福」を重要視した研究が多かったのである。しかしここでは親を対象にして、父親と母親の社会的なイメージ、親子のアクティビティ、そして親としての経験などについて触れてみたい。さらに「親」という立場が結婚と家族関係そのものをいかに伝統的なジェンダー関係にしているかも検討してみる。

アメリカ社会は日本より男女平等が進んでいるし、親子関係よりも夫婦関係を重視する社会であるから、母親というステータスについては日本よりも重要性を感じていないと日本人には写るかもしれない。しかし、現代アメリカ社会でも母親のイメージは、忍耐強く子供の要求にいつでも答えられる用

意ができていたといった古くからのイメージがまだ根強い (Boulton, 1983; Chodorow and Contratto, 1982; Daniels and Weingarten, 1988, Glenn, 1987; Ishii-Kuntz, 1995a)。この母親のイメージと対抗して、父親の方は家族から距離を少しおき、経済的な支援をするという、これまた古いイメージである (Daniels and Weingarten, 1988; Pleck, 1987)。特に黒人やラテン系アメリカ人に対する母親と父親のイメージは誇大されていて間違いが多い。例えば、黒人人口の中にはシングルマザーが多いことから、黒人の母親はとても強く、父親はいても存在しないと同じだというような偏見で見られ (McAdoo, 1988; McCray, 1980)、反対にラテン系アメリカ人の場合は父親が主権を持ち、家族は父親の言うことに絶対服従というイメージで見られる (Mirande, 1988)。このように、現代アメリカの家族を研究することは、男女差だけではなく、人種や社会層から生じる差についても注意を払わなければならない。

母親と父親が子供とするアクティビティについてもかなりの男女差がある。アメリカでは子供の年齢層が低い親についての研究の方が盛んであるため (Bradley, 1985; Giveans and Robinson, 1985)、小さい子供を持つ親に関してのアクティビティについて触れてみる。これらのほとんどの研究は母親の育児や子育てへのリーダー的役割と、父親の補助的な役割について述べている。特に、母親のこまめな子育ては「必要」であるが、父親の子育ては「選択」でしかない指摘している研究者もいる (Boulton, 1983; Daniels and Weingarten, 1988)。他に興味深いのは、父親がどのような理由で育児に参加しているかという研究が多いのに比べて、母親がどうして育児をしているかといった研究は無に近い (Barnett and Baruch, 1987; Radin, 1988; Coltrane and Ishii-Kuntz, 1992)。これは母親も、父親も、そして研究者も、父親の育児は「補助的」と見ているからであり、普通以上に育児に参加している父親達は例外なのである。

しかし、このような例外的な父親についての研究は1980年代の後半から盛んになってきている。例えば、家事をよくする父親については、母親と同じ

くらの育児を行い、そのような家庭では男女のリーダー的役割と補助的な役割の差はほとんどないこともわかっている (Berheide, 1984; Lamb, Pleck and Levine, 1986; Ishii-Kuntz and Coltrane, 1992a)。子供とのアクティビティに関しては、子供の年齢によっても変わってきており、子供が大きくなるにつれて父親の直接関与が多くなるという研究結果も出ている (Bronstein, 1988; McDonald, 1982)。

父親と母親の経験については、どちらも子育てに参加するのは良い事だと思っているアメリカ人の方が圧倒的に多い。しかし、社会学者ラロッサのいうように「父親の文化」(父親は子供の成長に常に関わっていた方が良いという文化)は存在していても「父親の行為」(実際、子育てに積極的に参加するという行為)の方が追いついていないという状況であるから、子育てはほとんど母親の仕事になっているのである (LaRossa, 1988)。更に、ラロッサによれば、子育てにあまり参加しないアメリカの父親たちは精神的にはそれが良くないと感じているが、それでも自分達の父親の年代とくらべると参加している率が多いので、それについては満足しているという。「父親の文化」があるとしても、アメリカの現代の男性は、父親の役割より仕事と結婚を重要視しているというデータもあるように、アメリカの父親たちの育児、子育て参加はやはり母親にくらべて極端に少ない (Cowan 他, 1985; Weiss, 1985)。

更に、子育てに関して言えば、家事と同様、男女の質的な差もある。例えば、女性はおむつ替えなどの必要不可欠な仕事が多いのに比べて、男性の場合は、週末のレクリエーションやショッピングを子供と一緒にするという比較的「楽しい」要素の多い行動が多い (Ishii-Kuntz and Coltrane, 1992a)。更に、家族で外出する場合も、父親は子供と遊んだり等の楽しい行動をするが、子供をトイレに連れていくという、「面倒」な仕事は母親に委ねられることが多い。子供との接触については、父親と母親の定義の仕方の相違もみられる。例えば、母親に子供と接触している時、どのようなことをしますかと質問すると、「食べさせる」とか「宿題をみてあげる」といった直接的で能動

的な行動が多いのに比べ、父親の場合は、「一緒にテレビをみる」とか「ショッピングに行く」とかの間接的そして受動的な行動が多い (Ishii-Kuntz, 1995 b)。

日本の父親研究は最近になって盛んになってきている。牧野、中野、柏木は日本のこれまでの父親研究の乏しさは、日本においての母子関係への傾斜がいかに強かったかという、裏側の問題を改めて浮き彫りにさせていると指摘している。更に、子供の発達には父親はそれほど重要ではないという仮定は、単なる仮定ではなく、日本においては現実であるということも指摘している (牧野、中野、柏木、1996:4-5)。日米の父親を比較した石井クンツの研究によっても、日本の父親の子育て不参加は明らかである (Ishii-Kuntz, 1995 b)。しかしこのような風潮の中でも、日本の子供の父親に対するイメージは必ずしも悪くはないことも石井クンツは指摘している (Ishii-Kuntz, 1992, 1994)。この現象には日本の母親たちが子供に与える父親のイメージが影響してくると思われる。つまり、父親が仕事の為に不在の家庭においては、母親が父親の役割を果たすと同時に、子供と父親の疎外感を減らす努力もする。この努力は例えば、「経済的プロバイダー」としての父親のポジティブな面を子供に常にわからせるといった風に表れる。

他の日本の父親研究では、父親の仕事と親というステータスのコンフリクトについて触れている。牧野の研究によれば、仕事はかなり忙しいと感じており、家庭よりも仕事を優先して働いている日本の父親の姿が浮き彫りになった (牧野, 1987)。更に、仕事が忙しい父親ほど、家族との接触時間が短くばかりではなく、休日も家族から離れて一人で過ごしたいと希望していることも明らかになった (土谷, 1992; 牧野, 1987)。反対に積極的に育児、子育てに参加している父親たちは、仕事と職場に何らかの不満を感じているといった研究結果も明らかになっている (Ishii-Kuntz, 1996)。このように、特に日本の父親を研究する場合、仕事と家族の関係を明確にすることが重要であると思う。

アメリカと日本において共通していえるのは、父親と母親の「行動」の相

違である。父親として、そして母親としての違った「行動」を通して男性と女性はジェンダーを作り上げていく。父親は子供との接触時間が少なく、そして一緒にいても間接的な接触が多い。反対に、母親は育児や子育てに関わる時間が多いし、その内容についてもかなり子供に身体的にも、精神的にも影響のある直接的な接触をする。このような毎日のおきまりの生活を経験しながら、女性は「女らしさ」に生きがいを見つけ、男性は「男らしさ」という社会的に認められたステータスに甘んじるのである。このジェンダー形成はあくまでも父親としての、そして、母親としての、「行動」から生まれてくると考えるのが、「Doing Gender」のコンセプトである。

最後に、従来の父親と母親の役目は結婚そのもの自体にも、強い影響を与えているということについて簡単に触れたい。アメリカの家族学の研究の中では結婚の幸福度に焦点をあてたものが多かった。特に、母親になってからの女性の結婚の幸福度が低下することに注目し、その理由等を探る研究が多い (Staines and Libby, 1986)。様々な理由が出されているが、その中でも特に注目したいのは、父親と母親の役目の違いである。アメリカでも出産を機に仕事をやめる女性はたくさんいる。そして、女性の多くが、育児や子育てに没頭し、父親である夫は仕事を続け育児参加はあまりしない (LaRossa and LaRossa, 1981; Ruble, Fleming, Hackel, and Stangor, 1988)。無論、育児に対するストレスもあるが、加えて、親という仕事に関しての男女不平等にも女性は不満を感じているために、子供を持った女性の結婚幸福度が減少するという説明である (Cowan et al., 1985)。

まとめ

本稿では、現代アメリカにおけるジェンダーと家族社会学の研究の中から、結婚、家事労働、そして母親と父親の役割やイメージについて触れてみた。更に、これらの家族関係を「Doing Gender」の視点から考えることを提起した。従来のジェンダーの定義はどちらかという社会的、あるいは文化的な「性差」を原点とするものが多かった。それに対して、毎日の通常の「行

動」をもとにジェンダーを定義すると、従来の家庭における男女不平等な関係から生まれる、そして、ノントラディショナルな家族関係の中から生まれるジェンダー・アイデンティティも理解できてくると思う。つまり、ジェンダーはカテゴリー的なコンセプトではなく、結婚や家族関係から生まれるリレーショナル(Relational)なコンセプトとして見るほうが、現代のアメリカ、そして日本における家族を理解する上で重要であると思う。

家族関係は、本稿で取り上げた、結婚、家事労働、親の役割だけでは無論ない。ジェンダー的視点から家族を見ると、家族関係の全てにジェンダーが関わっているのがよくわかる。たとえば、アメリカでも日本でも高齢化社会にあって、高齢者の介護の問題が指摘されている。アメリカの研究でも明らかになっているように、家庭内での介護をするのは中年の女性が圧倒的に多い。これらの女性は高齢者の娘であったり、義理の娘だったり、あるいは姉とか妹であったりする。介護については、介護者が経験するストレスが問題になっているが (Brody, 1988)、何故女性の介護者が多く、その事実がジェンダー・アイデンティティ形成にどのような影響をおよぼしているかなども「Doing Gender」のコンセプトを使い考えてみる必要があると思う。

私が選んだ、結婚、家事労働、そして母親と父親の役割のトピックの全てに共通していえるのは、ジェンダーとの重要な関わりである。この他の家族関係もジェンダーぬきでは理解するのがむづかしい。つまり現代アメリカの、そして日本の家庭内での「行動」が個人のジェンダー形成に与えている影響は大きいという事である。これらの現状を考察し何故、そして、どのようにジェンダーが家族の中で作り上げられ、更に維持されているのかを説明していくことが、今後の研究課題であるし、家庭での男女平等を築いていく上で必要不可欠になると確信する。

引用文献

- Barnett, Rosalind, C. and Grace K. Baruch. 1987. "Determinants of fathers' participation in family work." *Journal of Marriage and the*

- Family* 49: 29-40.
- Berheide, Catherine W. 1984. "Women's work in the home: Seems like old times." Pp.37-55 in Beth B. Hess and Marvin B. Sussman (eds.), *Women and the Family: Two Decades of Change*. New York: Haworth Press.
- Berk, Sarah F. 1985. *The Gender Factory: The Apportionment of Work in American Households*. New York: Plenum Press.
- Berk, Richard A., and Sarah F. Berk. 1979. *Labor and Leisure at Home: Content and Organization of the Household Day*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Bernard, Jessie. 1972. *The Future of Marriage*. New York: World.
- Boulton, Mary G. 1983. *On Being a Mother: A Study of Women with Pre-school Children*. London: Tavistock Publications.
- Bradley, Robert H. 1985. "Fathers and the school-age child." Pp. 141-169 in Shirley M. H. Hanson and Frederick W. Bozett (eds.), *Dimensions of Fatherhood*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Brody, Elaine M. 1988. "Parent care as a normative family stress." Pp.278-299 in Norval D. Glenn and Marion Tolbert Coleman (eds.), *Family Relations*. Chicago, IL: The Dorsey Press.
- Bronstein, Phyllis. 1988. "Father-child interaction: Implications for gender role socialization." Pp.107-124 in Phyllis Bronstein and Carolyn P. Cowan (eds.), *Fatherhood Today: Men's Changing Role in the Family*. New York: John Wiley and Sons.
- Browning, James, and Donald Dutton. 1986. "Assessment of wife assault with the Conflict Tactics Scale: Using couple data to quantify the differential reporting effect." *Journal of Marriage and the Family* 48: 375-379.
- Cancian, Francesca. 1986. "The feminization of love." *Signs* 11:

- 692-708.
- Cancian, Francesca, and Steven L. Gordon. 1988. "Changing emotion norms in marriage: Love and anger in U.S. women's magazines since 1900." *Gender and Society* 2: 308-342.
- Chodorow, Nancy, and Susan Contratto. 1982. "The fantasy of the perfect mother." Pp.54-75 in Barrie Thorne and Marilyn Yalom (eds.), *Rethinking the Family: Some Feminist Questions*. New York: Longman
- Clarke, David D., Christine M. B. Allen, and Maria Salinas. 1986. "Conjoint time-budgeting: Investigating behavioral accommodation in marriage." *Journal of Social and Personal Relationships* 3: 53-69.
- Coltrane, Scott, and Masako Ishii-Kuntz. 1992. "Men's housework: A life course perspective." *Journal of Marriage and the Family* 54: 43-57.
- Coverman, Shelley. 1985. "Explaining husbands' participation in domestic labor." *Sociological Quarterly*, 26:81-97.
- Cowan, Carolyn P., Phillip A. Cowan, Gertrude Heming, Ellen Garrett, Williams S. Coysh, Harriet Curtis-Boles, and Abner J. Boles III. 1985. "Transition to parenthood: His, hers, and theirs." *Journal of Family Issues* 6:451-481.
- Daniels, Arlene K. 1987. "Invisible work." *Social Problems* 34: 403-415.
- Daniels, Pamela, and Kathy Weingarten. 1988. "The fatherhood click: The timing of parenthood in men's lives." Pp.36-52 in Phyllis Bronstein and Carolyn P. Cowan (eds.), *Fatherhood Today: Men's Changing Role in the Family*. New York: John Wiley and Sons.
- DeVault, Marjorie, L. 1987. "Doing housework: Feeding and family life." Pp. 178-191 in Naomi Gerstel and Harriet Engel Cross (eds.),

- Families and Work*. Philadelphia: Temple University Press.
- DeVault, Marjorie, L. 1991. *Feeding the Family*. Chicago: University of Chicago Press.
- Dobash, R. Emerson, and Russell P. Dobash. 1979. *Violence against Wives: A Case against the Patriarchy*. New York: Free Press.
- Edleson, Jeffrey L., and Mary P. Brygger. 1986. "Gender differences in reporting of battering incidents." *Family Relations* 35: 379-382.
- Fishman, Pamela M. 1978. "What do couples talk about when they're alone." Pp.11-22 in Dianne Butturff and Edmond L. Epstein (eds.), *Women's Language and Style*. Akron, OH: University of Akron.
- Giveans, David L., and Michael K. Robinson. 1985. "Fathers and the preschool age child." Pp.115-140 in Shirley M. H. Hanson and Frederick W. Bozett (eds.), *Dimensions of Fatherhood*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Glenn, Evelyn N. 1987. "Gender and the family," Pp.348-360 in Beth B. Hess and Myra M. Ferree (eds.), *Analyzing Gender: A Handbook of Social Science Research*. Newbury Park, CA: Sage.
- Hochschild, Arlie R. 1989. *The Second Shift*. New York: Viking.
- 育児連. 1995. 育児で会社を休むような男たち。東京：ユック舎。
- Ishii-Kuntz, Masako. 1992. "Are Japanese families 'fatherless'?" *Sociology and Sociological Research*, 76: 105-110.
- Ishii-Kuntz, Masako. 1994. "The Japanese father: Work demands and family roles." Pp.45-67 in Jane C. Hood (ed.), *Men, Work and Family*. Newbury Park, CA: Sage.
- Ishii-Kuntz, Masako. 1995a. "Mothers." Pp.507-510 in David Levinson (ed.), *Encyclopedia of Marriage and the Family*. New York: Macmillan.
- Ishii-Kuntz, Masako. 1995b. "Paternal involvement and perception

- toward fathers' roles: A comparison between Japan and the United States." Pp.102-118 in William Marsiglio (ed.), *Fatherhood*. Newbury Park, CA: Sage.
- Ishii-Kuntz, Masako. 1996. "A perspective on changes in men's work and fatherhood in Japan." アジア文化研究 (Asian Cultural Studies), 22: 91-107.
- Ishii-Kuntz, Masako and Scott Coltrane. 1992a. "Predicting the sharing of household labor: Are parenting and housework distinct?" *Sociological Perspectives*, 35:629-647.
- Ishii-Kuntz, Masako and Scott Coltrane. 1992b. "Remarriage, stepparenting, and household labor." *Journal of Family Issues*, 13:215-233.
- Ishii-Kuntz, Masako and Alexandra Maryanski. (In press.) "Conjugal roles and social networks in Japanese families." *Sociological Quarterly*.
- 鹿嶋敬. 1993. 男の座標軸：企業から家庭，社会へ。岩波新書。
- 神原文子. 1991. 現代の結婚と夫婦関係。培風館。
- 神原文子. 1996. 「夫婦関係の緊張と挑戦」野々山久也，袖井孝子，篠崎正美編 いま家族に何が起きているのか：家族社会学のパラダイム転換をめぐる。家族社会学研究シリーズ1，ミネルヴァ書房，69-87。
- Lamb, Michael E., Joseph H. Pleck, and James A. Levine. 1986. "Effects of paternal involvement on fathers and mothers." Pp.67-83 in Robert Lewis and Marvin Sussman (eds.), *Men's Changing Roles in the Family*. New York: Haworth Press.
- LaRossa, Ralph. 1988. "Fatherhood and social change." *Family Relations*, 34: 451-457.
- LaRossa, Ralph, and Maureen Mulligan LaRossa. 1981. *Transition to Parenthood: How Infants Change Families*. Beverly Hills, CA: Sage.
- 牧野カツコ. 1987. 「働く父親の家庭生活と意識：仕事の忙しさと関連」。

- 家庭教育研究所紀要 8 : 42-51.
- 牧野カツコ, 中野由美子, 柏木恵子(編). 1996. 子どもの発達と父親の役割. 東京: ミネルヴァ書房.
- McAdoo, John L. 1988. "Changing perspective on the role of the black father." Pp.79-91 in Phyllis Bronstein and Carolyn P. Cowan (eds.), *Fatherhood Today: Men's Changing Role in the Family*. New York: John Wiley and Sons.
- McCray, Carrie A. 1980. "The black woman and family roles." Pp. 67-78 in LaFrances Rodgers-Rose (ed.), *The Black Woman*. Beverly Hills, CA: Sage.
- McDonald, Gerald W. 1982. "Parental power perceptions in the family." *Youth and Society* 14: 3-31.
- Morton, Teru U. 1978. "Intimacy and reciprocity of exchange: A comparison of spouses and strangers." *Journal of Personality and Social Psychology* 36:71-81.
- Noller, Patricia. 1982. "Gender and marital adjustment level differences in decoding messages from spouses and strangers." *Journal of Personality and Social Psychology* 41: 272-278.
- Notarius, Clifford I., and Jennifer S. Johnson. 1982. "Emotional expression in husbands and wives." *Journal of Marriage and the Family* 44: 483-489.
- Pleck, Joseph H. 1985. *Working Wives/Working Husbands*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Pleck, Joseph H. 1987. "American fathering in historical perspective." Pp.83-97 in Michael S. Kimmel (ed.), *Changing Men: New Directions in Research on Men and Masculinity*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Ptacek, James. 1988. "Why do men batter their wives?" Pp.133-157 in Kersti Yllo and Michele Bograd (eds.), *Feminist Perspectives on Wife*

- Abuse*. Newbury Park, CA: Sage.
- Radin, Norma. 1988. "Primary caregiving fathers of long duration." Pp.127-143 in Phyllis Bronstein and Carolyn P. Cowan (eds.), *Fatherhood Today: Men's Changing Role in the Family*. New York: John Wiley and Sons.
- Rubin, Lillian B. 1976. *Worlds of Pain: Life in the Working-Class Family*. New York: Basic Books.
- Rubin, Lillian B. 1984. *Intimate Strangers: Men and Women Together*. New York: Harper and Row.
- Ruble, Diane N., Alison S. Fleming, Lisa S. Hackel, and Charles Stangor. 1988. "Changes in the marital relationship during the transition to first time motherhood: Effects of violated expectations concerning division of household labor." *Journal of Personality and Social Psychology* 55: 78-87.
- Schneider, Beth E., and Meredith Gould. 1987. "Female sexuality: Looking back into the future." Pp.120-153 in Beth B. Hess and Myra M. Ferree (eds.), *Analyzing Gender: A Handbook of Social Science Research*. Newbury Park, CA: Sage.
- Shaw, Susan M. 1988. "Gender differences in the definition and perception of household labor." *Family Relations* 37:333-337.
- Staines, Graham L., and Pam L. Libby. 1986. "Men and women in role relationships." Pp.211-258 in Richard D. Ashmore and Frances K. DelBoca (eds.), *The Social Psychology of Female-Male Relations: A Critical Analysis of Central Concepts*. New York: Academic Press.
- Steinmetz, (1977). "The battered husband syndrome." *Victimology: An International Journal* 2: 499-509.
- Szinovacz, Maximiliane E. 1984. "Changing family roles and interactions." Pp.164-201 in Beth B. Hess and Marvin B. Sussman (eds.),

- Women and the Family: Two Decades of Change*. New York: Haworth Press.
- たじりけんじ. 1990. 父さんは自転車にのって：男の育児時間ストてんまつ記. 東京：ユック舎.
- 土谷みち子. 1992. 父親の生活実態と父子かかわりについて. 家庭教育研究所紀要 14：108-116.
- Weiss, Robert S. 1985. "Men and the family." *Family Process* 24: 49-58.
- West, Candace, and Don H. Zimmerman. 1987. "Doing Gender." *Gender and Society*, 1:125-151.
- White, James M. 1985. "Perceived similarity and understanding in married couples." *Journal of Social and Personal Relationships* 2: 345-357.
- Williams, Doris Giles. 1988. "Gender, marriage, and psychosocial well-being." *Journal of Family Issues*, 9: 452-468.

